

2021年(R3年)

10月

No. 352

# ひとはつうしん



社会福祉法人 ひとは福社会  
〒739-1203  
広島県安芸高田市向原町長田1857番地  
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

(ホムアド) http://hitoha-fukushi.com (メルアド) honbu@hitoha-fukushi.com

「寒さ」が大敵の気候が、いつの間にか「暑さ」が大敵の気候に変わってきました。皆さんいかがお過ごしですか。今年も猛暑が予想されますので、暑さに負けない気配りを工夫してください。

さて、最近山本弘子さんの手紙を読み返す機会がありました。その一部を紹介しします。

あなたのどりょくはみとめます。これからは「か」のかぎり自分なりに生きて下さい。あまり文めんはよくないかもしれないけれど、私なりに、いっしょうけんめいにかきました。

いつもかわいいとひょうばんの山本弘子より

私は文面にある「自分なりに」「私なりに」という言葉にひきつけられます。彼女は、常に「個の尊厳」について自らにも、社会にも問い続けているのだと思うと思います。

私たちにとって、津久井やまゆり園事件は過去の事件ではなく、常に人間としての尊厳を問わなければならないことを突き付けられているのだと改めて思わされました。

時代の激流に巻き込まれることなく、山本さんと思いを共有しながらそれぞれの「自分なり」の大切さを、仲間と共に問い続けていきたいと思ひます。

(理事長 寺尾文尚)



あたらしく入った  
ひとはの仲間たち  
～29.7～

- ① 名前
- ② 所属
- ③ ほめてあげたい過去の自分

- ① 古玉 麻友美
- ② ひとは工房
- ③ 今もですが、家族想いな自分

- ① 佐々木美春
- ② ひとは作業所
- ③ 高校の時、たくさん泣きながらも、3年間弓道を頑張った自分

- ① 山本 明美
- ② ひとは長屋
- ③ 孫をし、かり育てた自分をほめてあげたい。

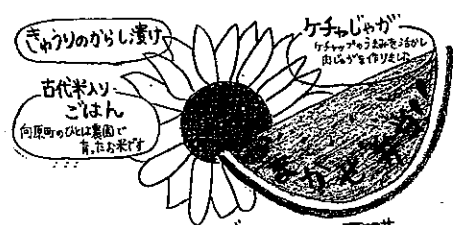
- ① 小林 かわり
- ② ひとは作業所
- ③ 小学生の頃、長く急な坂道を歩いて通学していた自分

- ① 加藤 光子
- ② くらむぼん
- ③ 何事も一生懸命にしますか、最後は「まアーいいか」な自分

## ササキ亭より。

昨年4月から、「おまかせランチ」を「おまかせ弁当」に変更して、安芸高田市内を中心に配達しています。

「楽しみにしてるよ」「また持ってきてね」と言葉をかけていただく度に、きららの顔もほころびます。これからも「お弁当」で頑張っていきます。なお、利用される場合は前日までに電話にてご注文ください。お問い合わせ: 0826-46-2218



「豆サラダ」  
トドろの豆サラダを入れてお楽しみください。  
20000

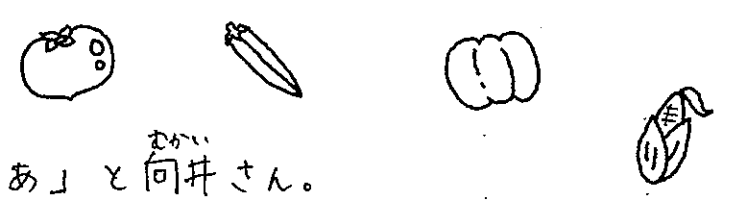
お弁当の帯の一例  
毎週変わります

「あやあね〜」言わんにゃあ

ひ 「ゆうべのごはん、何だったん？」向井さんがホームに泊まった朝、聞いてくる。  
「肉じゃが、焼き魚、ほうれん草のおひたしよ」や、と思い出し、答える。

「なんでえ〜」

「肉じゃが安かったんよ」



「あやあね〜」言わんにゃあ」と向井さん。

「あやあね〜、やる気がないからだし、肉じゃがしか思い浮かばないからたんよ」

「岩田さんはいつもやる気がない言うね〜」

は 向井さんはお決まりの会話をそれぞれの人たちと持ち、私をうたがらせる。  
(共同ホーム 岩田 富佐江)

「はちじ」

ホームのティータイムでは、月・水・金と週に3日、食堂からおやつを渡しています。

の 仕事をしていると今日が何日かわからなくなることがあり、うっかりおやつを出すことを忘れていた時、夕食を食べ終えた林出さんが「はちじ!」と一言。

林出さんのおかげで私も仕事を忘れながら、ホームのきららもおやつを食べることができたと思います。林出さん、ありがとう!

(食事部 上田 真実)

「子どもの成長、私の学び〜北海道からの手紙〜」

日 5月半ば、私は北海道に引越しました。暖かい日もありますが、風が冷たく、  
広島の4月初旬のような気候です。遠くを見れば山には雪が残っていることに驚き、

足元を見ればたんぽぽの背が高く、伸び伸び育っているように感じます。

ひ あくらぶを利用しているひろくんは、もと遊びたいという気持ちを言葉にできず、  
泣いて暴れて気持ちを表現していました。気持ちを言葉でどう表現するか、大人が代替

することによって、1年たった今はもと遊びたいときに「モウイカイ」と言葉にできます。

苦手なことがあっても良い、難しい時は「手伝って」と助けを求めて良い、女子きた  
ことをたくさん楽しむ! 私は、これからの人生で大切にしたいと思うことを学ぶことが

できました。  
(元あくらぶ所属 坂田 津季美)

語り継ぎたいこと - ころえ 帖 改訂版 -

気がつけば

そっと窓のすきららのぬくもり

(字: 宮崎 直幸)

編集後記

私はきららの向井さんから「文尚さん、しつかりせえよ。わしがついでとるけん」と言われた時の心地よさを忘れることができません。振り返ってみると、実は私が寄り添っているつもりで、寄り添われていたことが多いのではないかとさえ思います。もつと率直に言えば、きららの問いかけにも上から目線で、物言えぬ状況をつくっていたのではないかとさえ不安になります。私の中にも競争至上主義の世相が浸み込んでおり、きららにも普通という得体のしれない常識を押し付けていたのではないかと思っています。

そんな私にさえ、「わしがついでとるけん」と言ってくれます。心臓、きららに「私がついでとるけん」と言ってみたくらいです。「お願い、力を貸して」と頼られるのと、「〇〇しんさい」と指示されるのと、どちらが意欲がわくのでしょうか。誰でも頼りにされて「ありがとう」と感謝されることこそ意欲に感じる事でしょう。

ところが、私の中に善意の押し付けが顔を出し、「〇〇しんさい」と指示を出し、それに素直に従ってくれると、自分の力を誇示できた、とんでもない勘違いをしてしまいます。

最近グループホームのそくじほどに 時々 行っている。

ある朝 朝食後 テーブルに うつ伏せて 勤かひい 本田さん。  
着のままで 寝て行った アイスコーヒーを 湯のみにつぶと。何れもわが  
そばに置いて いた。その後いつの間にか 仕事にゆく 本田さんの姿が。

道に こと 忘れ、言葉も交さなかつた、うれしうた。もうすぐ 夏。  
静かに 水玉のワンス。羊夏のころ 買ってもらったのを思い出した。  
茅尾 順子

羊夏のころに